

令和元年度

日本近世文学会春季大会

- ・大会プログラム
- ・研究発表要旨

期日 六月八日(土)・九日(日)・十日(月)

会場 鶴見大学 記念館

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見二―一―三

- 一、出欠の葉書を五月十日(金)必着でお出しく下さい。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。
- 一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学生会事務局(慶應義塾大学)へお申し出ください。
- 一、大会経費は、参加費千円、懇親会費六千円です。
- 一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇三二〇二二一四二二八 口座名「日本近世文学会春季鶴見大学大会」)で、五月十日(金)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。
- 一、三日目(六月十日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。各自・各グループでお回りください。
- 一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。
- 一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
- 一、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。
- 一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会春季鶴見大学大会事務局

鶴見大学文学部 日本文学科 神林尚子研究室

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見二―一―三

鶴見大学六号館

電話 〇四五―五八〇―八一〇七(研究室直通)

メールアドレス kambavashi.n@surumi-u.ac.jp

※会場校の負担軽減のため、大会二日目の会場校による昼食(弁当)の提供はございません。各自ご用意ください。また同様の理由から、参加者用の発表資料送付もおこないません。会員各位のご理解ご諒解をお願いいたします。(事務局)

日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、令和元年度春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成三十一年四月二十日

【会場】鶴見大学 【行事】

第一日 六月八日(土)

委員会(一二・二〇～一三・四〇)

委員会会場 記念館二階 第二講堂

大会受付(一三・〇〇)

開会時間(一四・〇〇)

研究発表会(一四・一〇～一五・五〇)

研究発表会会場 記念館地下二階 記念ホール

1 那珂通高『文法捷徑』にみる幕末志士の浄瑠璃評釈

2 近世小説における章回形式

3 広瀬淡窓と『八犬伝』

日本近世文学会賞授賞式・総会(一六・〇〇～一七・三〇)

懇親会(一八・〇〇～二〇・〇〇)

懇親会会場 記念館一階 大学食堂

日本近世文学会春季大会会場校代表 神 林 尚 子
日本近世文学会事務局代表 津 田 眞 弓

【事務局連絡先】

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉四-1-1

慶應義塾大学経済学部 津田眞弓研究室

電話 〇四五-五六六一-二八二

e-mail info@kinseibungakukai.com

東京大学(院) 川 下 俊 文

盛岡大学 紅 林 健 志

明治大学名誉教授 徳 田 武

第二日 六月九日(日)

大会受付(一〇・〇〇)

研究発表会 午前の部(一〇・三〇)～二二・一〇)

研究発表会 記念館地下二階 記念ホール

4 『聚楽行幸記』 諸本考―伝本の整理を中心に―

5 賀茂真淵の有職故実研究

6 後水尾院歌壇と親王門跡

北海道大学(院) 竹内 洪介

県立広島大学 高松 亮太

学習院大学 鈴木 健一

昼 休 み(二二・一〇)～三三・三〇)

編集委員会会場 記念館二階 セミナー室二―

研究発表会 午後の部(一三・三〇)～二五・一〇)

7 『異本洞房語園』の諸本とその受容

8 大小暦と二世祇徳―浮世絵と俳諧の関連―

9 合巻の相板元―馬琴と種彦のトレード―

大東急記念文庫 長田 和也

同志社大学 神谷 勝広

実践女子大学 佐藤 悟

閉 会(二五・一〇)

第三日 六月十日(月)

文学実地踏査 各自・各グループでお回りください。

図書展示 日本近世文学会開催記念展示

日時 五月二十五日(土)～六月十日(月)

学会開催期間中、六月八日(土)は八・五〇～一八・〇〇開館、九日(日)は九・三〇～一六・三〇開館(二階展示スペースのみ)、十日(月)は八・五〇～二二・〇〇開館となっています。

場所 鶴見大学図書館一階 エントランス

※会場にて『近世文藝』九七号・九八号を無料配布いたします。

那珂通高『文法捷徑』にみる幕末志士の浄瑠璃評釈

東京大学(院) 川 下 俊 文

盛岡藩校作人館教授・那珂通高(一八二七—七九)は、幕末期に尊攘派志士として活動し、吉田松陰・宮部鼎蔵の東北巡遊に同行した。嘉永六年(一八五三)序をもつ『文法捷徑』二巻は、浄瑠璃作品五段(『太平記忠臣講釈』『双蝶々曲輪日記』『菅原伝授手習鑑』『傾城阿波の鳴門』『関取千両轍』)を選び、圈点と漢文の割注を付して評釈した書である。通高は浄瑠璃の文章を『史記』や『漢書』と比較し、伝記的な文章構成法を分析している。この独特な評釈はなぜ生まれたのだろうか。

松陰の『東北游日記』には、三人が旅中に『仮名手本忠臣蔵』の浄瑠璃を聴いて感泣したという記述がある。彼らは浄瑠璃を忠臣義士の伝として享受し、悲憤慷慨の具として愛好したのである。そして通高自身も、藩の重臣を標的とした斬奸を企てており、松陰たちは通高の伝記を著して義拳を喧伝しようとする準備を進めていた。義拳・立伝への欲求と、悲憤慷慨のための浄瑠璃愛好は、彼ら志士にとって通底するものだったと考えられる。

また、通高があえて卑近な浄瑠璃を評釈した動機は、自序によれば師・森田節齋の教授法に倣ったもので、その姿勢は維新後の論説「授文法須自卑説」(『洋々社談』一四号、明治九年)でも持続されている。通高の試みは幕末志士の特質にのみ回収されるものではなく、頼山陽・森田節齋から通高へと至る漢学の系譜に位置付けられ、明治期における洋々社同人としての活動にまで繋がるのである。

近世小説における章回形式

盛岡大学 紅 林 健 志

本発表では、近世小説における章回形式の導入について考える。章回形式は『三国志演義』や『水滸伝』等の中国白話小説が採る形式である。「第何回」という序数と、対句の章題を各章にもつ。また各回のおわりに波乱があり、次回に興味をつなげてゆく手法をとるのも特徴のひとつである(これを俗に「引き」という)。しかし、『三国志演義』の翻訳『通俗三国志』(元禄二年(一六八九)刊)は、「第何回」を使用しない。各回を二章に分ち、また、末尾の「引き」も踏襲しない。「水滸伝」の翻訳『通俗忠義水滸伝』(宝暦七年(一七五七)刊)も、同様に「第何回」を使用せず、各回を二章に分ち、これについて本発表は以下のように考える。これら通俗本は日本の軍記の形式に倣う。日本の軍記は一章一内容という原則をもつ。章回形式はこの原則に相容れないため、採用されなかった。

これが変化するのは、西田維則の訳業以降である。維則は中国小説の新しさを積極的に取り入れることにつとめた。章回形式の導入もその一環である。しかし、初期読本では章回形式の採用例は少ない。後期読本になり、次第に浸透してゆくが、後期読本の章題は趣向を凝らしたものが多く、章回形式もあくまでその一種にすぎない。ただ、読本が中編から長編に移行するに従い、次第に読本の章形式として主要な位置を占めてゆく。

以上の内容を章形式と目録の機能的側面に注目し、具体例をあげ述べる。

広瀬淡窓と『八犬伝』

明治大学名誉教授 徳田 武

広瀬淡窓に「小説を読む」という雑言古詩(全一三二字)がある(『遠思楼詩鈔』初編上)。『詩鈔』では、その七首前に文政三年七月、原古処・采蘋父子が咸宜園を訪れた際の作があり、その後に詩題に「暮春」「秋夜」「秋夜」(ともに文政四年の作か)の語が入る作が続き、「秋夜」の直後にこの詩が配置されている所から推して、早くも文政四年秋冬、遅くとも同五年に掛けての作と推定される。その内容は、間近に住んではいるが、なかなか思いが伝えられない佳人が郎君とようやく逢瀬を迎えて、一夜の歓びを極めるが、誓いや容姿が移ろうのを予感して、更に誓いの固さを求め、最後に郎君が帰還してくれるよう訴える、というものである。こうした内容は、女性の衷情を綿々と哀訴するものと要約できるが、こうした内容を含む小説を同じ頃に求めると、『八犬伝』第二十五回、浜路が犬塚信乃に哀訴する、有名な場面が想起されるのである。第二十五回を含む第三輯は文政二年正月の刊行であり(国会図書館本刊記)、淡窓が「小説を読む」を作った時期と近いのである。とすると、淡窓のこの作は、『八犬伝』第二十五回の内容を踏まえて作った可能性が強いのである。だとすれば、この作は、松川北渚が「先生も亦た時有りて綺語を作す」と評したように、あの固い儒者詩人淡窓が俗文学(小説)の柔らかな場面を意識して作った作品である、ということになり、雅俗の両文学が融合する所に成った稀有な作品だ、と評価できるのである。

『聚楽行幸記』諸本考

―伝本の整理を中心に―

北海道大学(院) 竹内 洪 介

天正十六年四月、後陽成天皇は前年に落成した聚楽第に行幸した。それは関白豊臣秀吉の権力を誇示する一大行事であり、政治的・文化的に重大な意義を有するものであった。秀吉は御伽衆大村由己に命じて『聚楽行幸記』を記させ、それを後陽成天皇や足利義昭に贈った。このような歴史的重要性から本書は主に歴史学の見地より論じられたが、未だ正確な伝本の整理はなかった。本書は後に太閤記物の嚆矢である『天正記』に収録され、国文学的にも大きな価値を有する。以上の点から、本書の諸本調査とその整理は極めて重大な課題である。

その問題点に鑑み、発表者は石塚晴通氏との共著による「大阪城天守閣『聚楽行幸記』解題・翻刻」(『古代中世文学論考』第38集、新典社)で、大阪城天守閣本がその料紙と装訂の特質から『聚楽行幸記』の原本の一つと見なせることを指摘した。それを踏まえ本発表では、『聚楽行幸記』諸本の調査と整理を行い、本書が後陽成天皇・足利義昭送付本系統と豊臣秀吉手控本系統の二系統に大別されることを中心に、大阪城天守閣本・尊経閣文庫本が二系統それぞれ祖本であることを示す。また、蓬左文庫本に存在する朱印は模刻による印であることを、奏覧本の副本と見なされてきた東山御文庫本が実はそうではなかったこと、さらに『聚楽行幸記』の成立時期が従来示されてきた「五月末」でないこと等を指摘し、その上で『聚楽行幸記』の全体像と展開の様相、そして各伝本の特徴について説明する。

賀茂真淵の有職故実研究

梶立広島大学 高松亮太

賀茂真淵が田安宗武の和学御用に任じられたのは、延享三年（一七四六）のことであった。このとき宗武が真淵に求めていたものが、有職故実に関する豊かな学殖であったことについては、既に国文学研究資料館寄託田藩文庫所蔵資料に基づき鈴木淳の重要な示唆が備わる（『田藩文庫考』、『田藩文庫目録と研究』等）。ところが、これまでの真淵研究においては、古典注釈や歌学、思想などに関する多大な蓄積があるものの、和学御用としての側面について十全な言及がなされてきたとは言いがたい。

本発表では、和学御用としての真淵の活動に焦点を絞り、まずは彼の著作や奥書資料、書入資料などに基づき、有職故実研究に関する事蹟を年代順に辿りながら、真淵伝の間隙を埋めていく。

続いて、その研究の多くが主として宗武の垂問によって、ときには宗武と協力しながら行われていたことを確認するとともに、二人の協力体制が生んだ成果が、互いの著作に反映していることを具体的に提示し、特に真淵の学問における宗武の存在の大きさを強調する。

さらに、真淵の有職故実研究、特に装束研究と源氏物語研究が連動する形で行われていたことを指摘したうえで、『源氏物語新釈』が長年にわたる装束研究の成果を取り込んだ注釈書であったという一つの特色を示し、彼の古典学における有職故実研究の意義付けを行いたい。

後水尾院歌壇と親王門跡

学習院大学 鈴木健一

後水尾院歌壇の研究は蓄積されており、天皇と臣下の関わりがさまざまに検討されているが、本発表ではそこに親王門跡がどう関わるかを探究する。時系列に即しながら、歌壇の始発から終焉まで親王門跡のありかたを総合的かつ個別に捉えていきたい。

初の親王御所和歌御会でも、空性・興意・良恕法親王が出席した。十五歳の若き親王の後見役として出席したのである。

そして、後水尾院は弟の堯然・道晃法親王に対して親しい感情を抱いていた。和歌に熱心なこの二人に古今伝受を授けたいと考えたのは後水尾院にとって自然なことだったろう。さらに、より若く初学の頃から指導に関わったという点で、道晃法親王への親近感は一入だった。そういったことと、当代・後代において歌人としての評価が道晃法親王の方が高くなることは密接に関連している。もちろん、道晃法親王の方により歌才があり、後水尾院はそれを見込んでさらに磨きをかけるべく、指導を綿密に行なったという点も見逃せまい。年齢差、個々の才能、教育過程とその質といった要素が関連し合いながら、両法親王への指導は進んでいった。

当時の堂上歌壇については、天皇と臣下という二項対立で捉えるのではなく、そこに親王門跡という存在を想定していくことで、より親密な空間が中核にあったことがうかがえ、歌壇のありかたが実態に即した形で立体的に把握できる。

『異本洞房語園』の諸本とその受容

大東急記念文庫 長 田 和 也

吉原に関する写本随筆『異本洞房語園』（享保五年序）が転写の過程で増補され、『北女閨起原』と改題されたことは夙に知られる。戯作者たちの『異本洞房語園』利用について、例えば式亭三馬は「てうちんのほうはしやべつあり。女郎やは鉄、あげやは木、ふな宿は竹なるよし北女閨起原に見えたり」（『大尽舞花街始』文化六年刊）と明言する。三馬作品の『異本洞房語園』（『北女閨起原』）利用の実態を検証する上では、「三馬按」から始まる増補記事のある本に拠るべきであろう。しかし三馬旧蔵本を紹介したとされる『珍書刊行会叢書』第一冊（大正四年）は翻刻の際に七種の諸本で本文が校合されている。また三馬増補記事のある現存写本三点は本文系統が異なる。三馬が自作に利用した本がいずれの系統の本か吟味する必要がある。

本発表では『異洞房語園』現存写本について、改題後も同系統の本文で書名「洞房語園」の本が並行して流通していたことや、天明期に記事を増補したとされる俳人徒流が享和二年頃に再び増補を行っていたこと等を踏まえて諸本系統を整理し、三馬がどの系統の本を目にしていたか指摘する。

また三亭春馬から譲られた『異本洞房語園』を蔵していた笠亭仙果が別本によって記事を補記し、その部分を春馬が仙果・春馬合作『店三絃緒連弾』（天保九年刊）に引用したことを指摘して、仲間内での『異本洞房語園』回覧校合の過程で作者たちが作品の趣向を得ていた受容の実態を例示したい。

大小曆と二世祇徳

— 浮世絵と俳諧の関連 —

同志社大学 神 谷 勝 広

浮世絵における錦絵誕生は、明和初期の大小曆（月の大小を絵などで工夫し表現した曆）流行が契機となった。しかし、その流行を主導したとされてきた巨川（旗本大久保忠舒）・莎鶏（旗本阿部正寛）の文化的背景には不明な部分が多く、また流行後（明和中期から天明初期）の大小曆の制作・配布に關しても具体的に検証されてこなかった。

今回、巨川が宝暦八年刊の絵俳書『世諺拾遺』を編集した際、江戸座俳諧の祇貞（後の二世祇徳）の協力があつたこと、莎鶏の俳諧の師が二世祇徳であつたことを確認できた。つまり、巨川・莎鶏と二世祇徳の間には、大小曆流行以前から俳諧に絡んで深い繋がりがあつた。大小曆流行の主導者とされてきた巨川・莎鶏の背後には、二世祇徳の支えがあつたと考えられる。

大小曆は、明和初期の流行後も制作・配布されている。東京国立博物館所蔵張込帖「大小曆類聚」を調査したところ、明和中期から天明初期にかけて、二世祇徳と彼の歳旦帖の入句者十六名が大小曆制作に関わっていた。さらに、大和郡山藩前藩主柳沢米翁の日記から、二世祇徳周辺では大小曆が継続的に配られていたことも明らかにできた。

二世祇徳周辺が関与した大小曆の流行は、錦絵を誕生させる契機となった。そして、二世祇徳らは、多色化した大小曆の制作・配布を続け、俳壇の維持・拡大を図つてもいる。浮世絵と俳諧の分野的な関連は、従来の想定よりも深い。

合巻の相板元

—馬琴と種彦のトレード—

実践女子大学 佐藤 悟

曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』には、馬琴が三代目西村屋与八（永寿堂）から初めて合巻を刊行するいきさつについて、「文政の初の頃いつみ屋市兵衛鶴屋喜右衛門を紹介として曲亭がり初て来訪して馬琴に新作の合巻冊子を刊行せまくほしとて乞ひしかは馬琴やうやくうけ引けり」と、和泉屋市兵衛（甘泉堂）と鶴屋喜右衛門の紹介であったことを記す。

この記事に該当する馬琴の合巻は文政六年刊『女夫織玉川晒布』である。見返しや奥目録には西村屋板であることが明示される。ところが下巻表紙には「甘泉堂／永寿堂／梓」と和泉屋との相板であることを記す。文政六年刊、柳亭種彦『水木舞扇猫骨』は種彦が初めて和泉屋から刊行した合巻である。表紙や奥目録から和泉屋板であることは明白であるが、上巻と下巻の見返しには「永寿堂／甘泉堂／合梓」と記される。西村屋が和泉屋に種彦を紹介したのであろう。あたかも二つの板元がお互いの主力作者を交換するかのようにして刊行した観がある。

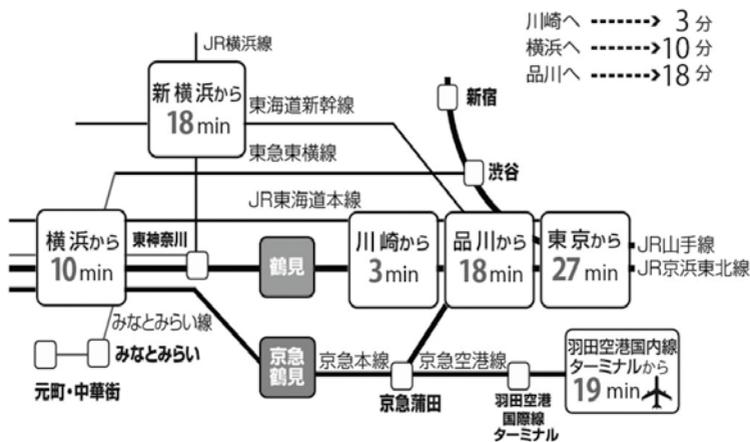
合巻が相板によって刊行されるのは文化前期から見られる現象であるが、不明な点が多い。文政六年のこの動きについては、馬喰町の西村屋と芝神明前の和泉屋がお互いの販路を開放した、地域を越えた大型の提携と見做すことができる。西村屋はその後も馬喰町周辺の板元との提携を強化している。文政期の合巻の出版部数の増加や相板による長編合巻の刊行の前提にはこのような板元の提携が不可欠であったことを示したい。

MEMO

MEMO

MEMO

会場へのアクセス



※鶴見大学の最寄り駅はJR京浜東北線「鶴見駅」と京浜急行線「京急鶴見駅」です。

会場案内図

